

デュエル・ア・ライブ

デュエル大好き！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は闘う。手には剣（カード）、腕には盾（ディスク）、そして大切な人と精霊達を救うための信念（デツキ）をその胸に、少女は闘う……！

少女は舞う。数多の人々の為に、護国の為に振るわれた閃刀を胸に抱いて空を舞う……！

と、言うわけで遊戯王とデート・ア・ライブのクロスオーバー小説です。

オリ主が士道と共に精霊を救うために戦います。

戦闘はデュエル、リアルファイトの両方です。

注意：デュエルに関する間違いや効果のミス、誤字脱字はどんどん送ってください。

第一話

目次

1

第一話

私は、抗う。『あの子』が幸せな結末に至れるのだとしても……この結末を
トゥルーエンディング
幸せな結末とは認めない。
エンディング

そして、奴等も認めない。あんな世界を壊すだけのガン細胞みたいな奴等を……

だから、作ろう。私の端末を。だから、送ろう、私の意思を。

だから、どうか……彼らを宜しくね……私のお人形さん。

……………

ビビビビビビビ!

「あーうーおー……」

私『とびいちおりづる鳶一折鶴』の朝は、交互に早い。お姉ちゃんを決めた朝の当番が交互に来るからだ。

「ううー……もう朝か〜」

私はパジャマを脱いで制服姿になると、エプロンを装着し朝御飯の準備をする。

え〜と……今日はスタンダードにトーストとベーコンエッグにするかな。

私はメニューを組み立て、手早く料理を作ってお皿に盛ると、そのままお姉ちゃんの

「……士道の妹さんの事？」

「うん。琴ちゃんって『お兄ちゃん大好き！』オーラ出しまくってるからねえ……つい、遠慮しちゃうんだよね」

「親友なら取り合っても良いべき。その時は私も相手になる」

「うん、まあ善処はするかなあ……」

私達は朝食を食べながら、話をする。おつと、今日の天気予報は……つと。

『本日未明、小規模な『空間震』が……』

「また？ 最近、多いね」

「……そうね」

私が最近多くなった現象……『空間震』について触れるとお姉ちゃんが急激に口が重くなる。

「……どうしたんだろう？」

「あ、登校しないと不味いね……ご馳走さま」

「ご馳走さま、今日も美味しかった」

「お粗末様……あ、今日は進級して初日だし夜ご飯は外食にしようよ」

「わかった」

私はお姉ちゃんにお弁当を手渡しながら言うと、お姉ちゃんは頷きながら家を出て

いった。

「さてと……私も行かなきゃ」

私は去年の誕生日に琴ちゃんから貰ったブレスレットを身に付けた後、忘れ物がないかどうかを確認してから家に鍵を掛けて歩き出した……

……

「おつはよー！ 鶴ちゃん！」

「おはよう、琴ちゃん」

入学式が終わって教室に着くと、私の親友である琴ちゃんこと『五河琴理』いつかことりが手を振りながら私に挨拶してきた。

「鶴ちゃん、鶴ちゃん！ 今日新しいデッキを組んだんだけど、後で試運転の相手をしてくんない？」

「うん、良いよ。私も新しいデッキを組んだところだから、試運転の相手が欲しかったんだよね」

「やったー！ じゃあ、何時もの……」

「よお、琴理！」

「げ!？」

私が琴ちゃんと約束をしていると、横から銀髪オッドアイの厨二病真っ盛りの男子が

話しかけてきた。

「……琴ちゃん？ こいつが嫌いなのはわかるけど、私を盾にするのは止めてくれる？」

「ごめん、鶴ちゃん……でも、やっぱり無理……」

まあ、痛々しいからねえ……

因みにこいつの名前は『はこう覇皇・ルシファーL・スルトS・キング王者』。

名前も完全無欠な厨二病なんだよね……因みに何故か初対面から琴ちゃんを名前呼びだし、ベタベタしてくるし、何より琴ちゃんを見る眼が欲望丸出しだから琴ちゃんからは思いっきり嫌われている。

「おいおい、恥ずかしがるなよ……それよりも、何時になったら俺とデートしてくれるんだ？」

「……前に言ったでしょ、鶴ちゃんとの決闘に勝つたらするって」

「……しようがないな。鳶一さん、俺と決闘してくれないかな？」

「……はいはい（デツキは……久しぶりにこれかな？）」

私は溜め息を吐きながらDEM社製の『デュエルディスク』の最新モデルである『デュエルD・リアライザリアライザ』を起動する。

「『デツキ、セット！』デュエルリアライザ『決闘顕現』、起動！」

私たちはデュエルディスクにデツキをセットすると、キーワードを言って私達の周辺

にソリッドヴェイジョンが展開される。

「……………うくん、基本の『草原A』か。ま、何処でも良いんだけどね」

「お、今日も覇皇が鳶一に挑むのか」

「何回負けたら懲りるのかねえ……」

「以前なんて禁止制限を無視した全盛期の『征竜』を使ったのにボロ負けしたもんね……………」

「しかも『征竜の回し方を知らなかった』というオチも付いたしな……」

「鳶一も鳶一で覇皇が捨てたデッキを次の日に使って、お手本を見せるかのようにぶん回してポッコポコにしたからな……」

私が周りを見渡すと、私達がデュエルを始めたのに気付いたのかクラスメイト達が集まってきた。

あ、みんなの言葉に覇皇のこめかみがピクピクしてる。

「……………決闘！」

覇皇：LP4000

私：LP4000

私達が闘いの合図を言うと、私はデッキからカードを5枚引いて確認する。

……………うん、次のターンに行けるね。

「先攻は俺だ！俺は『召喚師のスキル』を発動！『クリフオート・ツール』を手札に加える！俺はクリフオート・ツールと『クリフオート・アセンブラ』をペンデュラムスケールにセッティング！ツールの効果で2体目のアセンブラをサーチして、そのままペンデュラム召喚！『クリフオート・アーカイブ』2体とアセンブラを特殊召喚！アーカイブをリリースしてで『クリフオート・デイスク』をアドバンス召喚！デイスクの効果で『クリフオート・ゲノム』2体を特殊召喚！これで俺はターンエンド！エンド時にアセンブラの効果で二枚ドロワー、ゲノムは自壊してエクストラデッキに行く！」

覇皇：LP4000↓3200

クリフオート・デイスク ATK2800

クリフオート・アセンブラ ATK2400

おお、初っぱなから飛ばすねえ……

覇皇：LP3200

手札：2枚

フィールド：クリフオート・デイスク（攻）、クリフオート・アセンブラ（攻）

ペンデュラム：クリフオート・ツール、クリフオート・アセンブラ

魔法・罫：無し

「ま、蹂躪するんだけどね。私のターン、ドロー！」

あく……うん、引いても引かなくても勝ってたから……折角だし、使うかな。

「手札から『ヒーローアライブ』を発動！ ライフを半分払って、デッキから

『E・HEROシャドー・ミスト』エレメンタルヒーローを攻撃表示で特殊召喚！」

私：LP4000↓2000

E・HEROシャドー・ミスト ATK1000

「そのまま効果で『フォーム・チェンジ』を手札に加える！ そして『E・HEROブレイズマン』を召喚して、効果を発動して『融合』を手札に加えるよ！ そして融合を発動！ ブレイズマンと手札の『E・HEROエアーマン』を融合して『E・HEROノヴァマスター』を特殊召喚！」

E・HEROノヴァマスター ATK2600

『一族の結束』を発動！ 墓地には戦士族しかいないから戦士族のシャドー・ミストとノヴァマスターの攻撃力は800アップ！ そのままバトルフェイズ！ ノヴァマスターでクリフオート・ディスクに攻撃！ 『ヒートオブノヴァ』！」

シャドー・ミスト ATK1000↓1800

ノヴァマスター ATK2600↓3400

ノヴァマスターVSクリフオート・ディスク

ATK3400 VSA TK2800

覇皇：LP3200↓2600

「ノヴァマスターの効果で一枚ドロウ」

「ぐ……だ、だがシャドー・ミストの攻撃力でアセンブラは……」

「アセンブラにシャドー・ミストで攻撃！ ダメステで『E・HEROオネステイ・ネオス』の効果を発動！ このカードを捨ててシャドー・ミストの攻撃力を2500アップさせるよ！ 『オネステイ・ミストスラッシュ』！」

「何だと!？」

シャドー・ミストVSクリフオート・アセンブラ

ATK1800↓4300 VSA TK2400

覇皇：LP2600↓700

「ぐはあ!? だ、だが……次のターンで……」

「次のターンは、無い！ 私は速攻魔法、フォーム・チェンジを発動！ ノヴァマスターをエクストラデッキに戻して『M・HERO光牙』マस्कドヒーローこうがを特殊召喚してダイレクトアタック！」

M・HERO光牙 ATK2500↓3300

「ば、バカな……うあああああああああああああ!？」

覇皇：LP7000→2600

「連勝記録更新……つと」

「鶴ちゃん、惚れ惚れするようなワンターンキルだったね……残りの手札はなんだったの？」

「ん？ 初期の手札はオネステイ、エアーマン、ブレイズマン、結束、『融合解除』だよ？ 因みにノヴァマスターの効果でドローしたのは『奈落の落とし穴』だった」

「手札に『速攻のかかし』とかがあっても負ける運命だったんだね……」

「まあね」

それにしても……なんで覇皇って、こんなに引きが悪い……

警報が鳴り響く。

『空間震警報が発令されました！ みなさんは急いでシエルターに避難をしてください』

！ 繰り返します………』

「え……うそ?!」

「空間震?! マジで?!」

「うそ、どうなって………」

「……そう、来たのね」

「(くくく……漸くこの時が来たか……!)」

私が慌てていると、琴ちゃんから何時もの天真爛漫さが嘘かの様な冷静な言葉が紡がれる。

「みなさん、急いでシエルターに避難してください!」

私が先生の指示に従ってシエルターに避難しようとすると……琴ちゃんが避難するみんなの間を縫って何処かに行こうとするのが視界の端に入った。

「琴ちゃん!? すいません、琴ちゃ……じゃなかった! 五河さんが違う場所に行つてるので連れ戻してきます!」

私は先生に一言言うと、慌てて人の波を掻き分けながら琴ちゃんの後を追った……